

24 お雇い外国人（6）日本初のガス灯設置：アンリ・ペルグラン

開国直後の1860年代、江戸幕府は国の近代化政策のためにヨーロッパに使節団を派遣しました。使節団のメンバーは、ガス灯によって明るく照らされる夜のヨーロッパの町の美しさに魅せられると同時に驚きを覚えました。そして使節団の提案によって、日本にガス灯を導入する計画が動き始めました。



Henri Auguste PELEGRIN
アンリ・ペルグラン

最初に、外国人居留地があった横浜でガス灯の設置が進められることになりました。1870年に明治政府と横浜市は、照明用ガス工場の建設と稼働に向けた競争入札を行い、日本で最初のガス工場建設会社を設立した高島嘉右衛門が落札しました。高島は、この分野の有能な技師を探し、アンリ・ペルグラン(Henri Auguste PELEGRIN) (1841-1882) と出会いました。ペルグランは、当時上海のフランス租界にガス灯を設置する任務に当たっていました。1870年に来日し、外国人居留地を含めた横浜の町全体の照明計画の準備を進めました。翌年には、明治政府から東京の照明計画の検討も依頼されました。そして、1871年から2年契約で、明治政府からお雇い外国人として正式に任命されました。必要な資材や装置を買い付けるために一度ヨーロッパへ戻り、日本に帰国して10か月後の1872年7月から、横浜でガス管を敷設する工事が始まりました。

1872年9月29日、10基のガス灯が初めて横浜の夜の町を照らしました。そしてその年の年末までには、300基以上のガス灯が設置されました。1875年に明治天皇がガス灯を視察するために、東京から横浜を訪れました。1874年に東京にガス灯が登場するまでは、東京から横浜まで汽車に乗って、横浜のイルミネーション見学をするのが、当時のトレンドの行楽コースとなりました。

ペルグランは、東京のガス灯の敷設にも尽力し、通算9年間の滞在を終えて1879年に日本を後にしました。その後、スペインのマラガ・ガス会社の経営に当たりました。そして、その3年後、製糖所建設のために滞在していたハイチで、41歳の若さで他界しました。

東京で初めてガス灯が設置された銀座には、現在でも「銀座ガス灯通り」と呼ばれる通りがあります。日本でペルグランの名を知る人はあまりなく、ガス灯はもうありません。しかし、ペルグランが日本にもたらした灯は、新たな時代を切り開こうとしていた当時の日本人に多くの希望を与え、形を変えて現在でも輝き続けています。

掲載日：2023年3月1日